

昨年の報恩講は、真宗大谷派僧侶である三橋尚伸先生にご法話をお願いしました。先生は、カウンセラーでもあり、末期医療の現場や社会に順応できずに苦悩される人々に向き合っておられます。

ご法話では、「私たち、人間の身に生まれたことに恩を感じているのだろうか」と、まず初めに問いかけられました。そして、「いのち」を私有化して平然と生きていく私たちに、仏教の説く「いのち」をわかりやすくお話しくださり、聞法の大切さをお説きになりました。

ご法話を聴聞させていただき、報恩の心は信心をいただいたところにあるのだと了解いたしました。

報恩講にお参りできなかった方々にも、是非、読んでいただきたく掲載しました。

人間に生まれたということ

～虚しい人生からの回復～

今日は、一時間ちよつとの間、楽な気持ちで聞いてください。報恩講は、恩に報いると書きますね。恩に報いるって具体的にどういうことでしょうか？ なんとなく「ああ、ありがたい」と手を合わせていけばいいのかな？ どうでしょうか？ あまり具体的なイメージが出てこないんですね。なんとなく恩に報いるんだと。

そもそも私たち、人間の身に生まれたことに恩を感じているのだろうか。

どうですか？ 当たり前のことだと思っているかもしれない。親がいて私生まれた。ただそれだけのことと思っているかもしれない。都合の良いことが次々と起こっている時は「ああ、良かった。生まれて良かった」と感謝できるかもしれない。しかし、自分に都合、嫌なことが次々と起こった時、そう思っているでしょうかねえ…。

思えないよね。年取ってオムツをあてられ、食事も介助が無ければできなくなったりした時に、「人間に生まれてほんとうによかった」と恩を感じられるだろうか…。

結局、私たちは自分にとって都合のよい時だけ感謝するんです。都合の悪いことが起これば、感謝どころではない。「怨み節」が出るんです。「なんでこんな最期を迎えなければいけないんだ」とか。

ついこの前も御嶽山で、楽しく山に行ってきた綺麗な空気を吸ってきた綺麗な紅葉を見ていたら、一瞬でそれが変わってしまったということがありましたね。そうだった時に「なんで私が…」と始まるんですよ。

でも自分が知らない誰かだったら、「いつかは人は亡くなるんだなあ」と思うだけです。第三者の問題、三人称の問題としか思わないです。知人や家族が亡くなると、やつと二人称の問題になる。でも自分がそうなるとは思わない。一人称の問題にはならないんです。そして「ああ嫌だ。私のところには起こらないように…」と思うだけで済ませてしまおう。これが私たちのあり方なんです。

だからほんとうの意味で、生まれたことを喜んでいないと思うのです。報恩講ですので、そのような私たちのあり方を

点検してみたいと思つて、このようなテーマにしました。

皆さん、Kさんをご存知でしょ。秋葉原通り魔事件を起こした人です。この人のことを知つた時に、皆さんは何かを感じ、何かをお互いに言い合つたはずですよ。

では、Tさんは？ これは十三年前、大阪教育大学附属池田小学校で児童を殺傷した人です。八人殺して十五人傷つけています。当時、皆さんこの方々のことを何か言つたはずですよ。

「酒鬼薔薇聖斗」、これは十七年前の神戸連続児童殺傷事件を起こした人。特に殺し方が残虐でした。当時十四歳の少年でした。

この方達のお名前をテレビや新聞で知つた時、皆さん一人ひとり何を感じましたか？ 家族とか知り合い同士で何をお話ししましたか？ 彼らに関して、彼らがやったことに関して、私たちは何を言つたのか、何を感じていたかを思い出してください。

たぶんほとんどの方は、私はあいつらほど悪くないと思つたはずですよ。正義に立つのです。この人たちは悪人。私たちは善人だと思つたはずですよ。そうやって分別したはずですよ。ちよつと油断すると、私たちはいつでも正義に立ち善人であるという立場から一步も動かないんですよ。確かに彼らは悪人ですよ。で、その後何を思つたか思い出してください。おそらく「あんなにひどい殺し方をしたり、直接縁の無いあんなに大勢の人たちをあのように殺したのだから、殺してしまえ。死ねばいい」と……。これが私たちの普通の感覚ですよ。私たち

は正義の立場に立つて、彼らはこの世にいてはいけないと考えるわけですよ。お互いにそう言つたでしょう。「あんな奴、死刑になればいい」と言いませんでしたか？

Tさんは、確かに死刑になりました。彼の思いどおりに。刑が確定して、わずか一年後に国によって殺してもらつたんです。彼はそれまで何度も自殺を凶つていているんです。精神科の病院にも通つています。でも、こつちの精神科もだめ、あつちの医者もだめ。ずうつと治療を続けているんですよ。それでもだめ。そんな自分を抹殺しようとして病院の屋上から飛び降りましたよ。自殺しようとしたんです。でも脚を折つただけ。人つて死ねない時は死ねないんですね。彼は死にたくてしょうがなかった。国によって自分の思いを遂げたのです。だから死刑は彼にとつて罰になつていないの。手助けになつてしまった。

それでね、こういう事が起こるたびに世間では、いのちの教育が足りないとか、いのちの大切さをわかつていないから、もつとそれを強化しようとするんです。そう言つておきながら、一方では世間や社会にとつて都合の悪い悪人は殺していいんですよ？ 死刑制度があるということは。これはおかしくありませんか？ すごい矛盾ですよ。

若者たちは、何を見て育つのかというと、学校で学んだことではなく、現実を見て学習するんですね。だから理由さえあれば殺していいんだと学ぶのです。

日本は、怨念を晴らすということが当たり前の国なのかなあと、私は最近よく思います。江戸時代までは、親の敵を討つのが日本男児でした。ほんの百五十年ほど前までです。敵

討ち、それは相手を殺すということですよ。それと同じようなことを未だにやっている。被害者感情をきちんと担保してあげるためには、怨みを晴らす必要がある、という発想で死刑制度を日本はいまだにやっている。それでいて、口では「いのちは大事よ、大切よ」と言っている。おかしいですよ。「都合の悪いのちは殺してもいい、自分にとって都合の良いのちは大事にしましょう」って。これが今の日本の事実です。これではほんとうの教育はできない。

「酒鬼薔薇聖斗」は、死んでいませんよ。十四歳だったので、大人の法律は適用されていません。九年前に名前と過去を変えて社会に出ています。

今、そのことを知ったあなたの中に、どんな気持ちが出てきましたか？

正直なところ、「それはよかった」とは思わなかったですよ。

「エッ!」、私の住んでいる地域には、その人が居ないで欲しい」と思ったのではないですか？

それが私たちの事実、あり方なんです。「自分の所から遠くに居て欲しい」と、そこでもまた分別するわけです。世間のルールでやるべき事を終えて出所したんですけど、私たちは許さないですよ。否、許せないでしょう。

ところが今の若者たちには、彼らの気持ちがよくわかるといふ子がいっぱいいるんです。子といっても三十代前半くらいまでの人たち。「彼らの気持ちがよくわかる」って。「自分もやってしまっていたかもしれない」って言います。私もカウンセリングしている相談者から同じようなことを、複数の

方から聞きました。だから彼らは、特殊な人じゃないの。やったことは相当ひどいですけど、特殊な例ではないです。

根本的なところをお話すると、彼らは、生まれたことを喜んでいない人々なんです。自分という存在が、おぞましいと思っているんです。

それがどうしてわかるかというと、悲惨な事件の起こった日は、多くが彼らの誕生日前後なんです。ネットがあるのですぐわかるんですよ。

これはどういふことかという、彼らにとっては、生まれた日がおぞましい日なの。皆さんは、お誕生日はそこそこ嬉しいでしょう？「おめでとう」と言えるぐらいの生活をされていると思うんですよ。ところが彼らにとつて、あるいは私のカウンセリングを受けている若者たちは、誕生日が近づくと不穏になるの。不穏というのは、ソワソワしたり、イライラしたり、死にたい気持ちが強まるんです。そして、こんな自分は居ていいのだろうかと思ってしまうんです。精神的な状況が非常に悪くなる。死にたくなるんです。でも自分だけが死ぬのは悔しいんです。こんなに苦しんでいる自分を助けてくれなかった世間もろとも抹殺してしまおうという気持ちなんです。だから誰でもいいの。自分が悲鳴をあげていることに気づいても手を貸さなかった、あるいは気づかずに助けてくれなかった人間なんて居てもしょうがない。そんな世間なんて消滅すればいいと思っているんです。

Kが事件を起こしたのは、母親の誕生日の翌日でした。「私」という存在そのものがおぞましいということ。これは

すごく悲惨なことだと思えます。

世間では、みんなそんなことぐらい我慢してるじゃないか。我慢できないほうが悪いんだと斬って捨てます。

では仏教では、どうなんだろうか。

世間の価値観で斬って捨てるのは簡単ですよ。自分を正義に立たせておいて「あいつ、悪い奴」だから「死刑になればいい」でおしまいです。

皆さんは、何のためにここ（寺）に来ているんですか？

ここは出世間、世間を超えた価値観を教えてください。それです。仏教は世間を超えた教えでしょう？ それを教わるためにここ（寺）に来ているんですか？

皆さんは、自分の居場所がありますか？ 家庭に、地域に、あるいはグループの中に。でも居場所が確保できない人たちは今いっぱいいます。学校に行っても、そこが居場所にならない。会社に行っても、そこが居場所にならない。家庭にも居場所が見つけれられない。そういう人がいっぱい居るんです。そういう苦しみも彼らにもあつたんですが、なぜ彼らはあんな事件を引き起こしたのか…。

世間は原因を探します。こういう酷いことをする人は、何か原因があるからじゃないかと。ところが同じ原因があつても、やらない人もいます。そつちの数のほうが当然多いわけです。その中には、ぎりぎり留まっている人もいます。

じゃあ、何が違うと思いますか？

「縁」です。仏教は縁を考える。そこが世間と違うところですよ。

同じ原因があつても同じ結果にはならないのは、縁が違うからです。

簡単な例でお話しします。毎日五十年間タバコ喫っていた。そんな人いっぱいいますよね。同じ原因です。ところがAさんは九十歳まで長生きしました。Bさんは五十歳代で肺ガンで亡くなってしまいました。同じ原因があつても違う結果です。まじめに頑張った人は、悪い結果が出たら悔しいですよ。不条理だと怒るんですよ。「何でこの私が」と。「こんなまじめに生きていたのに、何で私がこんな結果になるんだ」と始まるんです。だけど縁が違います。原因は努力でなんとか多少改善できるかもしれないけど、縁は残念ながら私たちの手の内に無いんです。努力は関係ない。自力も関係ない。つくべき時につくべき縁がつくんです。つかない人にはつかないの。

私、彼らを想うと、仏教に出遇えなかった人たちについて思うんです。世間の価値観だけしかなかった。とつても残念なことだと思えます。それは彼らの責任じゃないですよ。誰の責任でもないんです。縁というのはそういうものです。ただなぜか私たちは、努力が有効だと思つて妄想を生きているわけです。だから、ちゃんと生きていないからだとか、努力が足りないからだとか、まじめさが無いからだとか考えてしまふんです。それは違うんです。

世間では「あなたはあなたであつていい」とは言ってくれません。世間の求める理想の人にならなければ許しません。

もう少し小さいところで言えば、妻は、夫の理想どおりになってくれないと愛せなかったり。恋愛中は違いますよ。夫

は、自分の理想どおりの妻にならないと許せなかったり、私の欲で人を縛ろうとする生き方しかない。だから私の理想ではないあなたはダメなんです。大きく言えば、社会の理想ではない彼らはダメなんです。殺されればいいと思ってしまうんです。抹殺ですね。小さいところから大きいところまで。親は子どもにもそうしているでしょう？ 赤ちゃんが生まれる前は「無事に生まれてくれればいいな」と、小さな欲。ところが生まれた途端に、まあ次から次へ欲で縛っていく。世間というのは「あなたはあなたであってはよくない」のです。ところが仏教では、世間を超えた価値観で「あなたはあなたでいいんですよ」と言ってくれる。お経に書いてあるんです。それは世間にはない世界です。白い花の人は白く咲いたらしいし、黄色い花の人は、黄色く咲いていればいい。これが仏教の価値観です。

でも残念ながら、世間だけを生きていた彼らには、その教えは届いていなかった。やったことは残酷だけれども、かわいそうだと思います。私はそこに悲しみを見ます。縁がつかなかった悲しみです。

仏は、悲しみを見てくれるんですよ。「如来大悲の恩徳は」と、さつき皆さんで唱和しましたね。「如来大悲」、「大楽」ではない。悲しみを見てくれるんです。「あんな奴、ダメだから死ねばいい」ではなくて、「悲しいよね。つくべき縁がうまくついてくれなかったね」と、誰のせいでもない悲しみを受け取ってくれるのが仏なんです。

そういう世間とは違う価値観をお寺で学んでいくことが大事なんだと思うんです。お寺に来てまで世間の価値観を学ん

でもしよがないですよ。世間を超えた別の視点で自分を見るのが、仏教でありお寺で勉強することだと思うんです。

世間ではいのちを自分のものだと思っている。学校教育もそう。特に最近はいのちは部品のように扱われている。いのちはDNA。いのちは細胞。だから部品が悪くなったら、他人の部品をもらってすげ替えてしまえばいい。部品じゃないですか。いのちは大事だと言っておきながら部品扱い。いのちはDNAだと教わって、苦しい時に生きる力になりますか？ ならないですよ。いのちというのは存在まることなのです。それがいのちだと思うの。

「今、いのちがあなたを生きている」という私たちの宗派が掲げている標語があります。いのちの問題をここで言っているんですよ。とつてもいい標語でしょう？ でも、これは不思議な日本語だと思いませんか？ 「いのちが」が、主語になります。世間だと「私が、いのちを生きている」ですよ。無意識にいのちを私物化しているです。そして悪くなった部品は、元気なものに取り替えればいい。でも部品が手に入らないことが多いので脳のある部分がダメになったら、死んだことにしようか決めてしまいました。それ以外は生きていますよ。他の細胞全部が生きていますよ。でも生きた心臓が欲しいから、本当は生きていますよ。死んだことにして取り出してしまう。すげ替えてしまう。これが世間で言う「私のいのち」ですよ。私の手の中にいのちがあると思っているから、そういうことをするし、いのちを粗末にもできるし、嫌になったら「もういいや、こんな人生」と、

いのちを断つてしまえばいいと思う。

大谷派では「いのちが、あなたを生きている」と言います。「いのち」というよくわからないけれども、不思議な存在が私たちの中を生きてくれている。だから、いのちはあなたのものではないんです。

「おめでとう。赤ちゃん授かったね」と言います。そして、私たちは受け取ってしまうと自分のいのちにしてしまう。でも、やがて返さなければいけないでしょ？ もらえばなしにはできません。臨終は必ず来ます。しかも返し方も、返す時期も決められないの。もしかしたら十歳で返さなくてはいけないかもしれないし、お腹の中で返すこともある。生まれる前にです。あるいは今、病院に行くと、九十歳百歳は当たり前です。そこでは、みんな早くお迎えに来てと言っていますよ。「早く死にたい」、「こんな姿になってまで生きていたくない」と。「家族の迷惑になってまで、家族のお荷物になってまで生きていたくない。殺してください」と、私は頼まれます。だけれどもいのちは、返してと言われるまで返すことさえできないの。「もうそろそろ返してください」と言われるまでは嫌でも生きなければいけないし、本当はもつと生きてたくても「もう、返してね」と言われたら、返さなければいけないですよ。惜しみながらこの世に「さよなら」するの。「有り難う」「いのち楽しませてもらったよ」って、「苦労もあつたけど結構楽しませてもらったよ。有り難う」ってお返ししなければならいんですよ。

だからいのちは、授かったんではないですね。預かっているだけなんです。私たちには、授かったりお返ししたりする

自由が無いんです。

他人のいのちも同じ。他人の預かったものを壊してはいけません。他人のいのちも同じ。他人の預かっているいのちだつて私の勝手に壊してはいけません。壊したくても預かりものです。そういうことが仏教でなければ教われないのです。「今、いのちがあなたの中を生きてくれている」ということです。いのちは部品ではありません。

また、いのちに、良いも悪いもありません。私たちは、いのちを分別できないの。お預かりしている大事ないのちだから、良い悪いは一切ありません。

で、このことをシンプルに書いてあるものがあります。それは、みなさんお寺に来るたびに唱和している「三帰依文」です。今日はゆつくり皆さんとご一緒に読みます。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいづれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は百千万劫にも遭遇うこと難し。我い

ま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん

「人身受け難し、いまずでに受く」。今日最初に私が言ったことですね。人間に生まれるって大変なことです。当たり前ではないですよと言っている。とっても難しいんです。人間に生まれるって。

だけれども「いまずでに受く」。今あなたたちは人間の生を生きていますねと。

「仏法聞き難し、いまずでに聞く」。人間に生まれるだけでも大変な難関を通過しているのに、色々な宗教があるなかで、無宗教もあります。あなたは仏法に出会いましたねと。さっきお話しした「縁」ですね。大変な難関を通過して「いまずでに聞く」、縁がついた。

二つ難関をクリアしたんですね、皆さんは。

「三帰依文」には無いんですけど、私は三つ目の難関を考えているんです。

仏教にも色々あるでしょう？ 私も昔、真言宗とかチベット密教を勉強していました。それなのに浄土の教えに出遇ったんですね。これが三つ目の難関です。この三つの有り難い縁がついて、やっとここに来られたんですね。これはすごいことです。当たり前ではないんですね。そして、この縁がついたのは、自分が善人だったからでも善い生き方をしてきたからでもないの。縁がついてくれたんですね。ただそれだけのことです。私たちは、この三つの難関をクリアして、今、ここに居るのです。

「この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん」。今回この人間に生まれている間に「度せずんば」、ある仏教的な境地に至らないのであるならば、一体いつやるんですか。と書いてある。だから今しかないの。だって次は人間に生まれなにかもしれない。人間に生まれることは、難しいんだから、今しかないんです。「度す」は、ある一定の境地、あるいはもう少し柔らかい言い方をすると、「仏道を歩む」ということです。それを今生にやるしかないんですよと書いてある。

このように、とってもシンプルなんですけれど、一番重要なことが「三帰依文」の最初に書いてあります。

その後は、仏教の三つの宝に帰依しますというのだけれども、すべてに「衆生とともに」がついている。ここがまた超世間なんですよ。世間だと私の都合のいい人とだけでグループを作って、いいところに行きましようになっちゃおう。そして「大衆もろともに」は、一人も残さず一人もこぼさず全員みんな一緒にということ。この中に「彼ら」が入るんですよ。全員の中には。人を殺してしまうような「彼ら」も入っているんですよ。みんな一緒に浄土の教えを歩みましようと思ってるんですよ。これは世間では考えられないですね。「悪い奴は仲間に入るな」が世間ですから。

仏・法・僧の「僧」ですが、これは「僧団」です。皆さんは、衣（ころも）を着ている者が僧侶で「自分は僧侶でない」と思っているらっしゃると思うの。でも違うんですよ。浄土の教えでは、「僧」というものは仏道を歩む人すべてです。ですから皆さんも一緒。法衣（ころも）を着ているかどうかは

関係ないの。だから浄土の教えでは、僧侶に手を合わせるのではなくて、お互いに手を合わせる関係なんです。平座です。話す方が上で聞く方が下というのではなて、お互いに手を合わせあえる関係なの。

先の事件を起こした「彼ら」も手を合わせる対象です。やったことは酷いですよ。とんでもない酷いことをしてしまつた。だけれども手を合わせる相手なんです。私は、彼らから多くのことを教わっています。こういうお話しをしている時でも、なんで「彼ら」だったのかな？ 縁がついていたらそれは私だったかもしれない。彼らは悪い役を引き受けてくれているんですよ。「彼ら」は、人は縁を生きる存在だと教えてくれる善知識、先生かもしれない。だから仏道を歩むものとしてお互いに手を合わせていく。これが「僧に帰依したてまつる」です。

では、具体的に恩に報いる生き方って、どういう生き方だろうか。

さつきから私は縁の話しをしています。縁は自分の自由にならないけれども、仏道、浄土の教えに縁のついた私たちがやるべきことがあると思うんですよ。

世間の価値観に縛られて苦しんでいる人がいたら「世間でない価値観で生きることもありなのよ」って一言、言つてあげることでないでしょうか。それなら私たちでもできますよ。違う価値観、違う視点をちよつと示してあげる。実はそれは阿弥陀仏のお仕事のほんの小さな手助けなんです。浄土の教えに出遇つたものとして、これがやらなければならぬ

ことではないでしょうかね。

立ち姿の阿弥陀仏像は「今すぐたすけに行くよ」という形を示しています。でも縁のない人たちの所には行けない。「彼ら」のところには行つてないですから。だったら動ける私たちが、「アミダさんは、あなたのような人を救うんですよ」、「人間を善悪で分別しませんよ」と、そういうことは言つてあげられないでしょうか。

仏道を先に歩む人として「何が出来るのだろう」と、私はずうつと考えているんです。

「彼ら」のような極端な例でなくても、自分のお孫ちゃんとか、お友達とか、身内にね、苦しんでいる人がいたならば、「そうじゃない考え方もあるみたいよ」って言つてあげられますよね。これが私たちにできることだと思ふの。

だから年取つたら余生をゆつくりなんて思つているのは大きな間違い。やる仕事はいっぱいあるの。余生つて、「余つた生」と言うこと？ とんでもない。いのちに余りもなにもないですよ。死ぬその時までちゃんと生きなければいけない。余りのいのちなんて無い。これ、仏教の考え方です。だから余生なんて無いです。

私たちには、最期まで大事な仕事が残っているの。どんな姿になつても。オムツをあてられようが、胃に穴を開けられて管からどろどろの栄養剤を通されようが、虚しく死んでいく必要はないんです。生きているその姿を見せればいいんです。人間つてこうなつて死んでいくと見せればいいんです。これが最後にできる私たちの大事な仕事です。だから虚しい人生とか、虚しい終わり方とか、余つたいのちなんて考え方

は、今日から横へ除けておいてください。「まだまだ仕事あるぞ」って、「仏道を歩むものとしての仕事が残っている」と思ってください。

皆さん「二河白道」の話しを聞いたことありますか？

西へ向かって進んでいく人が、火の河と水の河に行く手を遮られるんです。後からは群賊悪獣がこの人を殺そうと追いかけてくるんです。そして追い詰められたこの人は、火の河と水の河の間に細い白い道を見つめます。でも向こう岸までとても渡ることはできそうにない。引き返しても前に進んでもそこに留まっても死を免れそうもない。だから「この道を行くしかない」と決意するんです。

これは、苦しみのどん底にある人のことを言っているのです。行き詰まり、前に進めない。かといって戻ることもできない。留まっていたらますます苦しくなる。どう頑張っても死んでしまいうだ。そんな苦しみのどん底にいる人のことです。その人が、苦しみの底で「この身を生きていくしかしようがないな」と決意したと言うのです。

そうしたらその時に、後ろの方からお釈迦様の声が聞こえてくるのですね。「仁者（きみ）、ただ決定してこの道を尋ねて行け」と、お釈迦様が背中を押したんです。

そして、前の方から今度は阿弥陀様の声が聞こえてくるんです。「汝（なんじ）一心に正念にして直ちに來たれ」と。「仁者（きみ）」も「汝（なんじ）」も尊敬をもって人を呼ぶ時の呼び方です。私たちがどれだけ悲惨な状況にあっても、仏様からは尊敬され尊重され愛情をもって呼ばれるんです。「勇

気出して行ってごらん」って背中を押してくれているの。それでも勇気のない私たちに「大丈夫、心を一つにしてこつちにきなさい」って阿弥陀様が呼んでくれているの。背中を押してくれる存在と「おいで」と呼び込んでくれる両方がないと一歩も進めないのが、私たちなのです。

この仏様と同じ役目をするのが、難関を越えて仏教に出遇っている私たちだと思えます。皆さん、出来るでしょう。小さな声でいいですよ。「大丈夫だよ。こつちへおいで」って言ってあげればいいの。勇気が出なかつたら「一歩進んでごらん。見ててあげるから」って言ってあげる。これが私たちの仕事です。お釈迦様にはなれないし、阿弥陀様と同じはたらかはできないけども、ちよつとだけお手伝いはできるんじゃないかなと思います。

私たちはどんな状態でも、仏様から尊敬され尊重され愛されている存在なんだと、私たち自身がまず知っておいて、苦しんでいる人を見たら「みんなもそうなんだよ」と、伝えてあげられることが大事なんだと思います。

最後になります。私、お釈迦様が好きなので、お釈迦様が生まれた時のことを、ちよつとお話します。

お釈迦様は生まれてすぐ「天上天下唯我独尊」と言いましたよね。何歩歩いて言ったんですか？（「七歩目です」）はい、そのとおり。七歩目で言いました。これが重要な。六物語って全部意味があるんです。六歩目までは世間なの。六道輪廻と言うでしょ。七歩目は、世間を一步超えた超世間、仏教は世間を超えている価値観です。一步超えたところで初

めて「天上天下唯我独尊」という言葉が出るんです。世間ではこんな言葉は出てきません。

「天上天下」というのはね、都合のいい状態の身体と都合のいい環境に生まれた人も、悲惨な状況、もともと身体が悪いか、いろいろな病気を持つていたりとか、下の方這いずるような人生を生きなければならぬような人であっても、つまりどっちであつても、その人が独自の人として、白い人は白人として黒い人は黒い人として尊いのですよ、と仰つたんだらうと私は思っているんです。私だけが尊いのではなくて、一人ひとりがそれぞれ尊いと、お釈迦様は天と地を指さして仰つたんですね。どんな人生であつても上下は無い。その人がその人として尊いと仰つたんだらうと思います。世間にはこんな発想はありません。仏教は世間を超えている。ですから七歩目で言つたというところが大事なところですね。

もう一つお話ししていいですか？

最初に人間に生まれることつて大変なのよというお話しをしました、そのことを譬えで表現した物語があるんです。

「盲亀浮木の譬（もうきふぼくのたとえ）」と言います。

お釈迦様が弟子の阿難に「きみ、人間に生まれただけ、人間に生まれて感謝している？」と聞いたんです。そうしたら阿難が「それは、もう感謝しています」と。「じゃあ、どれくらい有り難いと思つている？」と尋ねられ、阿難は困つてしまつて「かなり有り難いでしょうけど……」という感じだつたんです。そうしたらお釈迦様が、譬え話をしたんです。「ある大海原に一匹の亀さんがいました。でもこの亀さん、

目が見えないんです。そしてその亀さんは、百年に一度だけ海の面に顔を出すことができるんです。

大海原に浮かび漂つてゐる木っ端が一つあります。それは腐つて小さな穴ぼこが開いてゐるんです。大海原ですから波に揺られてゐるわけですよ。亀さんは、百年に一回あがつてくるでしょう？ 亀さんがこの木っ端の穴ぼこからヒョツと顔を出す。

お釈迦様は「そんなことあるかね？」と阿難に聞いたんです。阿難は「かなり難しいんじゃないでしょうか」と。お釈迦様はさらに「じゃあ、ありえないことかね」と聞いたんです。そうしたら阿難尊者は「何億年、何兆年かかつてもしないことではないでしょうか」とお答えした。そうしたらお釈迦様は「そうだらう。人間に生まれるというのは、亀さんが木っ端から顔を出すチャンスよりも、もっと難しいことなんだよ」と仰つた。

これが「盲亀浮木の譬」といわれる物語です。

あなたが生まれたことは、当たり前ではないんです。せつかく生まれさせてもらつたんです。だから、そのチャンスを活かしてください。余生はありませんよ。最後まではたらいてください。それが、浄土の教えに出遇つた者の恩に報いる生き方だと、私は思つてゐます。

今日は「報恩講」ですので、このことをお話しさせていたいただきました。

悲しみをもつてゐる「彼ら」にも、私は、有り難うと言いたいです。

今日は本当に長い時間有り難うございました。

(二〇一四年十一月十五日)

1月2月の主な出来事

1月22日(木) 前住職 釋純昌 一周忌法要



報恩講でお付き合いのある6人の僧侶が、お勤めくださいました。役員の方々には、ご門徒を代表してお参りしていただきました。有り難うございます。

船橋市にある法音寺のご住職龍山了祐師は、「四門出遊」、お釈迦様が老病死を見て世の非常を悟り仏道を歩み始めた故事から、一周忌という法要も私たちが仏道を歩む縁となるものであると、ご法話くださいました。

1月2日(金) 修正会



初詣された方々に、「念仏申す生活をしましょう」と、住職がお話ししているところです。

1月28日 報恩講めぐり



練馬区谷原にある真宗会館の報恩講を増田征夫さん蓮沼典子さんと住職でお参りしました。一昨年は柏市の浄真寺、来年度は、どちらの報恩講にお参りするか検討中です。一緒に参詣しませんか！

2月2日(月)～4日(水) 真宗入門講座



真宗会館で2泊3日の日程で開催されました。あらためて浄土真宗に入門したいという方のための講座です。

今回は、田村晋一さん大胡登美子さんが参加しました。

来年の講座に参加してみませんか！

行事予定

- 3月21日 10時 春彼岸会
 - 4月5日 13時30分 花まつり
 - 5月10日 14時 同朋の会
 - 5月21日 親鸞教室
 - 6月7日 9時 八日講十日講
 - 6月12日 婦人研修会
 - 6月14日 14時 同朋の会
 - 6月17日 親鸞教室
 - 6月28日 8時30分 奉仕作業
 - 7月19日 14時 同朋の会
 - 8月10日 10時 孟蘭盆会
 - 9月23日 10時 秋彼岸会
 - 10月11日 14時 同朋の会
 - 10月18日 13時30分 世話人総会
 - 11月17日 13時30分 仏具磨き
 - 11月20日 報恩講 準備 速夜
 - 11月21日 報恩講 晨朝・日中
- ※ 以外は当寺が会場です。

川名喜昭さんが奉仕作業



境内の桜など樹木が苔むしているのを見かねて園芸病害虫防除剤を1月13日(火)と2月20日(金)に撒布してくださいました。苔が落ち樹木が元気を取り戻すことでしょう。